

## 「同じ石田王の卒りし時に、山前王の哀傷びて作れる歌」の特質

森

斌

### はじめに

万葉集には「代作歌」と呼ばれている作品がある。額田王などは、「代作歌人」とさえ言われている<sup>(1)</sup>。しかし、万葉集に「代作」という言葉は、一例のみなのである。その用例は、卷三・四二五番の左注で、「山前王、石田王に代りて作れり」とある。また、長歌四二三番の題詞に「同じ」とあることも珍しい表現である。そこでこの左注と題詞にまず注目して、この研究は山前王が詠んだ石田王挽歌の特質を考察する。

同じ石田王の卒りし時に、山前王の哀傷びて作れる歌一首

つのさはふ 磐余の道を 朝さらず 行きけむ人の  
思ひつつ 通ひけまはくは ほととぎす 鳴く五月には  
菖蒲草 花橘を 玉に貫き 「二は云はく、貫き交  
へ」 かづらにせむと 延ふ葛の いや遠長に 黄葉を  
折りかざさむと 延ふ葛の いや遠永く 「二は云は  
く、田葛の根の いや遠長に」 万世に 絶えじと思  
ひて 「二は云はく、大船の 思ひたのみて」 通ひ  
けむ 君をば明日ゆ 「二は云はく、君を明日ゆは」  
外にかも見む (三・四二三)

右一首は、或は云はく、柿本朝臣人麻呂の作といへり。

或る本の反歌二首  
隠口の泊瀬少女が手に纏ける玉は乱れてありといはず

やも(四二四)

河風の寒き長谷を嘆きつつ君があるくに似る人も逢へや(四二五)

右の二首は、或は云はく、「紀皇女の薨りましし後に、山前王、石田王に代りて作れり」といへり。

### 一、左注と題詞

引用した長歌群には、二首の反歌が或る本に載せられているが、その反歌四二五番の左注には代作だと記されている。しかも、長歌四二三番の左注には、或いは人麻呂の作であると注記されている。長歌では人麻呂の作品であるといい、反歌では紀皇女の挽歌を山前王が代作したという二つの左注は、どう考えたらよいのであろうか。

これまでの注釈では、沢潟久孝氏が研究史を踏まえて詳しい。そこでは、人麻呂が長歌を創作したという考えに疑問を示しつつ、異伝の多いことと人麻呂の作と同じ語句が見られることから、早くからこういわれていたのだろうとし、さらに反歌二首を山前王の詠作であることが編者に認められていた、とする。

しかし、題詞と左注を事実とすれば、まず山前王は、石田王の代作をして紀皇女の挽歌を作った。山前王は、人麻

呂に長歌一首の代作を依頼した。さらに、石田王の死を悲しみ傷む気持ちを表すために、以前に代作した紀皇女の死を悼む短歌二首を反歌に加えて長歌一首并せて短歌という構成に纏めた、とも解釈できる。

ところで、万葉集が正資料としたものと参考にした資料の二種類あったとすれば、その正資料には或る本の反歌二首が載せられていたのであろうか。或る本の反歌とわざわざ断つて記載していることは、巻三が正資料とした文献には反歌が記されていなかったからであらう。題詞にも「歌一首」とあつて、長歌の歌数を記しているだけで反歌に触れる「并せて短歌」という言葉がない。従つて、石田王の挽歌には、反歌が載せられていない資料と反歌が記されている資料の二種類あったことになるのではないか。では左注は、さらに第三者のな資料の存在によるのであろうか。左注の形式はまったく同一であるから、注記した人物は同一人か、或いは同じ編集グループである。とすれば或る本には、長歌と反歌二首が載つていて、しかも人麻呂の創作したという長歌の注記と紀皇女の挽歌を山前王が代作したという記録とがあつたのであろう。

引用した四二三番の題詞に「同じ」とあつたが、石田王の挽歌には丹生王の詠んだ長歌并せて短歌からなる挽歌

(四二〇)~(四二二) もあつて、同一人の死に二首もの長歌が万葉集に記録されている。この題詞にある「同じ」とは、同じ対象人物だからという意味ではなく、同様に、同じさまでということであるが、珍しい形式である。「同」とあるのは、巻四・七三五、同七三七の題詞に見られる。

同じ坂上大嬢の家持に贈れる (七三五)

同じ大嬢の家持に贈れる (七三七)

大伴家持が坂上大嬢に暫く疎遠であつたが、再び逢つて相聞歌を贈答した時の一連の歌に用いられているのであるが、家持の題詞には「又」(七三三、七三六、七三九)、「更」(七四一)とあつて「同」と呼応している。このことは、丹生王と山前王とに詠まれた石田王を悼む挽歌が、少しく時間的ずれがあつて「同じ」と題詞に付けられたのかもしれない。さて、ここで問題にしたいのが、

石田王の卒りし時に、丹生王の作れ歌一首〔并せて短歌〕(四二〇)

とある挽歌の作者丹生王である。

万葉集には丹生女王という歌人が巻四・五五三番の題詞に登場していて、相聞歌を旅人に贈っている。丹生女王が

丹生王と同一人物であれば、石田王の妻にして後に旅人と親しい人物だったと想像できる。またこのことから、歴史的に経歴の知られない無名というべき石田王の挽歌が二首も万葉集に載せられていることが旅人・家持という大伴氏との縁で理解されることになる。即ち、巻三とは、家持の編纂と増補が試みられているからである。試みに挽歌に関わる伝記的なことを記せば次の通りになる。

王と女王と言うことでは、河内王と河内女王とは別人であるが、しかし同一人物の場合もある。但し、同一人物であれば丹生女王の歌(巻四・五五三、五五四、巻八・一六一〇)は、旅人に贈った歌であるから神亀年間から天平二年の大納言に任じられて上京する迄の成立するであろう。続日本紀には天平十一年従四位下から従四位上、また天平勝宝二年に正四位上になっている。夫の死を悼む挽歌は、妻によつてうたわれる例が万葉集に多々見られるのであるから、丹生王は妻の一人であろう。

石田王は、万葉集の題詞に登場するだけで具体的な系図、経歴は知られない。ただし、人麻呂の詠んだ挽歌とほぼ時代が重なるのであろうから、人麻呂と同時代か、それ以前の生まれで、持統・文武朝に活躍した人であろう。万葉集が編年体で歌が並べられていることから、朱鳥元年の大

津皇子辞世歌、そして持統三年に大宰帥に任じられて豊前鏡山に埋葬された河内王の挽歌群に続いているから、持統朝の後半から、文武朝前半に作られた挽歌かもしれない。

山前王は天武皇子忍壁の子である。続日本紀には、慶雲二年に無位より従四位下になり、養老七年に卒した、とある。懷風藻には「従四位下刑部卿山前王」ともあるが、その任官年次については不明である。同じ天武の皇孫である長屋王は、享年四十六歳とする時天武十三年に誕生したことになるし、また五十六歳で薨去したのであれば天武三年に出生したことになる。長屋王は天武の長男である高市皇子の子供である。同様に、山前王は忍壁皇子のこどもであるから天武朝の中頃から晩年に誕生した王だったのではあるまいか。

紀皇女は、天武の皇女である。同母兄に穗積皇子がいる。穂積の誕生が天武二年と考えられるから、皇女もそれからほどなくの誕生であろう。弓削皇子が皇女に贈った歌(一・一一九―一二二)や、卷三譬喻歌の冒頭を飾る三九〇番歌を参考にするとき、養老の初年に恋愛で話題になることは事実としてないのではあるまいか。とすれば卷十二・三〇九八にある左注の、

平群文屋朝臣益人の伝えて云はく「昔聞かく、紀皇女竊に高安王と嫁ひて嘖はえらえし時に、この歌作り給ひき」といへり。

とあることは、高安王の年令から考えても伝説などとして判断してよいのであろう。そして、天武の子供である紀皇女は、天武の孫となる山前王とは、恐らく一世代異なるのであろう。

最後に問題になる人物が柿本人麻呂である。年代が知られる人麻呂の歌は、持統三年から文武四年までが創作時期である。

これらのことから判断したいのは、石田王と山前王が如何なる関係にあるのか。また、紀皇女と石田王が如何なる関係であるのかが問題になる。この問題については、三田誠司氏が興味深い説を示されている。その根本に石田王を紀皇女の子供としたことである。そして石田王の妻に丹生王を想定している。<sup>(3)</sup>

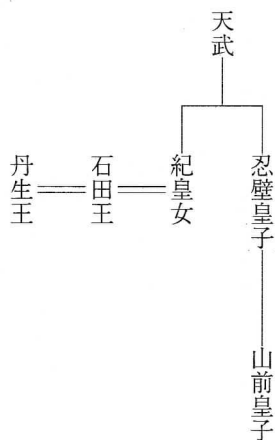
この推定で興味深いのは、紀皇女を石田王の母としていうことである。子供が母の挽歌を作るとは現代からみて当然なのであるが、しかし万葉集から類型が見いだし得ないのであるまいか。そのことは、曾倉岑氏の「親の死に関

する子女の挽歌の確實な例の見出せない万葉集のありかた」という指摘にもなる<sup>(4)</sup>。

むしろ、夫婦の関係、或いは恋人とも判断される親しい間柄、兄弟姉妹、さらに父母から子供へという対象で挽歌が作られている。子供が亡き母のために挽歌を代作させるというより、妻の挽歌を作っている状況と同質ではなかったのか。即ち、紀皇女も石田王の妻とすべきではないのか。そして紀皇女の兄穗積皇子の年令を配慮したとき、忍壁皇子の子供である山前王は一世代若いのであるが、挽歌の有様からは紀皇女の子供とすることが躊躇われる。

むしろ山前王は、石田王とは友人というよりもある官庁における部下の一人であったのではないか、とも想像される。もしかしたら懷風藻にある山前王の関わる刑部省の上司であったかもしれない。即ち、代作とは友人だからということよりも、天皇であったり、例えば上司などの身分の高い人からの依頼であろう。とすれば旅人の妻の死を悼み「日本挽歌」をうたい旅人の代作した山上憶良が思い浮かぶ。

今仮に推定系図を示せば次の如くである。



かく考えるときに、少しく触れなければならないのは丹生王の挽歌である。そこには「なゆ竹の とをよる皇子さ丹つらふ」(四二〇)とあって妻帯していても早世であつたらしいことを表現している。しかし、この描写は、事実を誇張的にいつているだけでなく、死者に対する褒めことばと考へてはどうであらうか。憶良の熊凝哀悼歌でも、少年の姿を常識よりも若々しく語っている。このことは写実的な内容で長歌を理解できないことになるが、作品の分析からしか係累については想像できないことも事実であるから、留意点ではある。

一つの仮説としては、次のごとく考へている。丹生王は、石田王の妻の一人であつた。紀皇女は天武の皇女であり、石田王のやはり妻である。石田王は、山前王の上司であつ

た。

## 二、長歌の表現

山前王が悲しみ傷ついて詠んだとする長歌の左注には人麻呂の作とある。この人麻呂が実作したかどうかといえ、形式的なものからかなり信憑性があるのであろう。それは山前王が忍壁皇子の子供であることも推量を助ける。また、人麻呂と即断出来ないにせよ、「一に云はく」としてゐる異文が四ヶ所あることも人麻呂的ではある。しかし、これを根拠にして人麻呂と直ちに判断できないことも事実であらう。

そこでまず「玉に貫き」が「貫き交へ」になっている最初の異文箇所表現について考察する。ここを長短の二句で考えるとき、「菖蒲草 花橘を 玉に貫き」「貫き交へ」かづらにせむと」とある表現は、類型としてはどちらも卷十・一九六七番「かぐはしき 花橘を 玉に貫き 送らむ妹は」と家持歌である卷十九・四一八〇番に「菖蒲 花橘を 貫き交へ 縋くまでに」とある表現に近似している。とりわけ家持の歌は、この挽歌の「一に云はく」を剽窃したごとくである。このことは、家持の伝統意識からすれば人麻呂や古歌につながるものであるにせよ、四一八〇番の

表現は口誦の影響を配慮すべきであらう。その意味では、「一に云はく」が口誦の性格がますます強いことになる。また、表現のこのような類似からは、家持がこの挽歌を知っていたことを意味する。題詞に「同じ」とあって、この表現の家持歌群との類似性についてはすでに触れた。次に「延ふ葛の いや遠永く」が「田葛の根の いや遠長に」と「万世に 絶えじと思ひて」が「大船の 思ひたのみて」となっている連続した二番目と三番目の箇所を考えたい。

「延ふ葛の いや遠永く 万世に 絶えじと思ひて」が「田葛の根の いや遠長に 大船の 思ひたのみて」となるのであるが、典型的なのは「大船の 思ひたのみて」とある表現だけである。むしろ、「一に云はく」は、より類型表現になっていることになる。

しかし、ちなみに「通ひけむ」を修飾する言葉としてみると、

あをによし寧楽の家には万代にわれも通はむ忘ると思

ふな（一・八〇）

などともあって、万代までも通うことがうたわれる。即ち、通う年月の長久であることがうたわれるのである。

ところが異伝では「大船の 思ひたのみて 通ひけむ」というのであるから、これはむしろ類型が見いだせないが、しかし「田葛の根の いや遠長に 大船の 思ひたのみて」という表現で考えれば、まさしく類型的存在である。一般論としても、個性が類型化するのであるから、推敲などの理由にはこの箇所も異伝もならない。即ち、挽歌に「ほととぎす 鳴く五月には」と「九月の 時雨の時は」とある五月と九月の対応は、すでに存在していた或る本の反歌の「玉」（四二四）と「河風の寒き」（四二五）を配慮しているためであって、山前王が人麻呂に紀皇女への代作を踏まえる形で依頼したためである。従って、もともとが人麻呂の作品であり、山前王が人麻呂に依頼したのである。本文と一云の箇所とは、推敲で説明するよりも個性と類型ということから伝承されたため生じた異伝ということで説明できる。

さて、挽歌では、よく春と秋を対とすることがある。人麻呂も明日香皇女挽歌では「春べは 花折りかざす 秋立てば 黄葉かざし」（二・一九六）とあって、春と秋を対句で用いている。また、春と秋で年月の経過、或いは時の永遠などを示すこともあるが、ここでは夏の五月と秋の九月で石田王夫妻の永遠であることを導いている。ここにこ

の長歌の独自性がある。但し、春と秋という対比が一般的であるにもかかわらず夏と秋がこの長歌で用いられているのは、花橘がうたわれていることと関わる。家持がうたった「橘の歌一首」（四一一）には、

春されば 孫枝萌いつつ

ほととぎす 鳴く五月には 初花を 枝に手折りて

秋づけば 時雨の雨降り（略）橘の 成れるその実は

み雪降る 冬に到れば 霜置けども その葉も枯れず

と春夏秋冬の橘が歌われている。

ここで大事なことは、春や冬の橘ではない。夏の白い花と秋の実なのである。そして、その橘に新しい価値を見いだしたから、

橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が  
欲し（四一二）

と、家持は反歌にうたうのである。

この石田王を悼む長歌に試みられている表現の独自性は、三田氏も既に指摘していたいる夏と秋の景物を用いて「万世に 絶えじと思て」という時の永遠性に結びつけたことにある。<sup>5)</sup>

### 三、反歌と長歌

左注には紀皇女の挽歌を山前王が石田王の代作をしたのだと記していた。とすれば長歌の創作には、既に反歌が存在していたことになる。既製の短歌を利用して挽歌を創作したのであるが、その問題を考えてみたい。一般的には、長歌の要約を反歌として詠む、或いは長歌の叙情をさらに発展させてうたう、などが反歌である。反歌として機能をさらに発展的に解消してかなり自由な立場で短歌を添えている場合もある。

しかし、いくら自由だからといって全く長歌から解き放されているわけではなくて、おのずから制約はある。石田王の挽歌の場合は、長歌の創作以前に存在している紀皇女の挽歌に基づき作られているのであれば、長歌が反歌二首に制約を受けたことになる。反歌が先に作られていて、後に長歌がうたわれた例としては、

岡本天皇の御製一首并せて短歌

神代より 生れ継ぎ来れば 人多に 国には満ちて  
あぢ群の 去来は行けど わが恋ふる 君にしあらね  
ば 昼は 日の暮るるまで 夜は 夜の明くる極み

思ひつつ 眠も寝がてにと 明かしつらくも 長きこの夜を（四・四八五）

#### 反歌

山の端にあぢ群騒き行くなれどわれはさぶしゑ君に  
しあらねば（四八六）

淡海路の鳥籠の山なる不知哉川日のころろは恋ひつ  
つもあらむ（四八七）

が参考になる。

そもそも四八五番の長歌は第三句第四句「人多に 国には満ちて」、そして第十五句第十六句「明かしつらくも 長きこの夜を」の結びは、卷十三・三二四八番の「人多に満ちてあれども」「恋ひや明かさむ 長きこの夜を」という表現に近い。長歌の構成が三二四八番に負うものであり、さらに反歌の影響が「あぢ群の 去来は行けど わが恋ふる 君にしあらねば」という表現になったことを、中西進氏が指摘している。<sup>6)</sup>

このことは長歌の構成、そして表現が先行する特定の作品を意識的に伝統として利用したり、模倣したりすることになる。或いは表現の発想に決定的な役割を果たす場合もある。石田王の挽歌の場合は、長歌の個性と述べた「花橘



を 玉に貫き」「長月の 時雨の時は」という夏と秋の対応に關わりをもちそうである。

第一反歌にある「玉」は、夏に咲く橘の花を玉とする表現に、また第二反歌にある「河風」は、九月の時雨という表現にそれぞれ展開していったのではないか。このことは万葉集から適当な歌を取り上げ得る。そして、次に引用した歌が橘と玉の連想を証明している。

かぐはしき花橘を玉に貫き送らむ妹は贏れてもあるか  
(十・一九六八)

ほととぎす何の心そ橘の玉貫く月し来鳴きとよむる  
(十七・三九一二)

橘の 珠に合へ貫き 纏きて 遊ばふ間も (十九・四一八九)

さらに橘と繁栄については次の歌が参考になる。

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の  
樹 (六・一〇〇九)

さて、河風と長月の結びつきは、そもそも「河風」という歌語が一例なのであるが、風と寒さとの連想で、容易に秋の風を連想させる。

今よりは秋風寒くふきなむをいかにか独り長き夜を宿む (三・四六二)

家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴きわたる  
(七・一一六一)

引用した二首などは「秋風」と「寒し」の組合せである。また、風と黄葉との組合せも

十月時雨に逢へる黄葉の吹かば散りなむ風のまにまに  
(八・一五九〇)  
風吹けば黄葉散りつつすくなくも吾の松原清からなく  
に (十・二一九八)

に見られるが、十月に吹く風では黄葉が散ってしまうのかもしれない。

さてこのように見てくると反歌にうたわれている玉と河風とは、長歌の表現を誕生させる下地になっていることが確認できる。しかし、長歌の表現の独自性は、反歌の影響もありながら、そこには「夏」と「秋」という季節から「延う葛の いや遠永く」という時間の永遠であることに結びつけていることは認めなければならない。そこに長歌作家の表現の手柄もあったのであり、作品として後世に伝

承されるだけの評価も受けていたのであらう。

#### 四、泊瀬 挽歌

石田王が埋葬された地は、丹生王の挽歌に「隱国の 泊瀬の山に 神さびに 斎きいますと」とある。この泊瀬は、万葉に三十二首が詠まれていて、枕詞「隱国の」と結びつく山間の地である。万葉以前では、衣通の王が伊予の国に流された軽の太子を追い掛け追いついたときに、太子が「待ち懷ひて」と言う気持ちでうたった古事記歌謡に泊瀬が登場している。

隱国の 泊瀬の山の 大峯には 幡張り立て さ小峰  
には 幡張り立て 大峯にし 仲定める 思ひ妻あは  
れ 槻弓の 伏る伏りも 梓弓 立てり立てりも 後  
も取り見る 思ひ妻あはれ (八九)

隱国の 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎杵を打ち 下つ瀬  
に 真杵を打ち 斎杵には 鏡を掛け 真杵には 真  
玉を掛け 真玉なす 吾が思ふ妹 鏡なす 吾が思ふ  
妻 存りと言はばこそよ 家にも行かめ 国にも偲は  
め (九〇)

記の物語では、伊予で心中する前にうたったのであるが、物語に提われないで歌謡を見ていく時、「幡張り立て」が葬送のためであらうから、八九番の「思ひ妻」は、独立歌謡としての解釈が亡き妻のことになる。

記九〇番は、万葉集卷十三の相聞に収められた三二六三番とほぼ同文の歌であるから、相聞の内容で理解されていたのかもしれない。しかし、死を確認しているからこそ「吾が思ふ妻 存りと言はばこそよ」とうたうのである。さらに川が禊の場であると同時に、「斎杵」「鏡」「玉」が葬儀に関わる道具であらうから、独立歌謡としての本質は挽歌である。葬送に関わりをもつ場所が「隱口の 泊瀬の山」「隱国の 泊瀬の川」である。ちなみに山前王の代作した紀皇女の挽歌でもある第一反歌には、「隱国の泊瀬少女」とあり、第二反歌には、「河風の寒き長谷」とある。また、丹生王の作った挽歌には「わご大王は 隱国の 泊瀬の山に 神さびに 斎きいますと」とあって、夫婦がそろって墓所が泊瀬であったことになる。泊瀬とは、相聞の性格もあるが、やはり挽歌の色彩に満ちている。ところが、山前王の作った長歌には、反歌に登場させた泊瀬を何故かうたわない。

さて、反歌にうたわれた泊瀬少女は、紀皇女のことか、

或いは泊瀬に葬られた皇女を泊瀬娘子が悲しんでいること  
としているのか、解釈は二つに分かれている。しかし、泊  
瀬に紀皇女は埋葬されたのであるから「隱口の泊瀬少女」  
ということになるし、また埋葬地であるから「河風の寒き  
長谷」という第二反歌の表現になることも自明のことであ  
る。

そもそも万葉集では、記紀歌謡と同様に泊瀬は相聞と挽  
歌とに関わる地名であるが、とりわけ挽歌と密接に結びつ  
く地名であることを和田嘉寿男氏が指摘している。<sup>7)</sup>さらに  
特徴としては、地名に山と川がやはり関わりを見せていて、

隱口の泊瀬の山に照る月は盈昃しけり人の常無き

(七・一二七〇)

三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脈し絶えずはわれ忘れめ  
や(九・一七七〇)

の如くである。

また挽歌に登場する泊瀬は、卷十三・三三三〇～三三三三  
二番までの三首一組がある。さらに卷七の挽歌には、

隱口の泊瀬の山に霞立ち棚引く雲は妹にかもあらむ  
(一四〇七)

狂語か逆言か隱口の泊瀬の山に廬せりといふ(一四〇  
八)

とあつてそれぞれが卷三の挽歌の、

隱口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあら  
む(四二八)

逆言の狂言とかも高山の巖のうへに君が臥せる(四二  
一)

が伝承していく過程で卷七の二首も生まれたのかもしれない  
性格に満ちている。しかも、四二一番は、石田王の長歌  
挽歌の反歌であるから、石田王挽歌の伝承歌が存在した証  
になる。加えて家持歌には、「菖蒲 花橋を 貫き交へ  
護くまでに」(四一八〇)と言う表現などで先行した山前  
王の作つたと題詞に記す石田王の挽歌に剽窃と判断したく  
なるほど類似した表現もあった。

地名を配慮した時、石田王の挽歌は、或る本の反歌に地  
名がうたわれていて泊瀬挽歌の伝統に連なる内容がある。  
にもかかわらず泊瀬山も泊瀬川もうたわずに長歌を創作し  
た点に特質があるのである。むしろ、泊瀬が反歌にあると  
ころから重複をさけているのかもしれないが、そのために

夏の橘の花を玉のようにつらねて髪にして、また秋九月の時雨の時に黄葉を折つて髪飾りにして通う石田王が生前に「つのさはふ 磐余の道を 朝さらず 行きけむ人」として強調されることになっている。

従つて、泊瀬から磐余の道を通つて行くという意味が「つのさはふ 磐余の道を」という長歌の初句と第二句にある。さらに藤原京に自宅があつたためか、勤めの為か不明にしても、親しい女性と泊瀬が生前も死後も関わつていたのであるから、磐余の道とは石田王のプロムナードということになる。

## 五、代 作

石田王を悼むために献上された歌であれば解釈できるが、しかし反歌四二五番には紀皇女の死を悼む挽歌として理解できない箇所がある。即ち、紀皇女の挽歌が一応原型のままに石田王の挽歌に転用されて用いられているとしたら、第四句にある「君」が紀皇女の夫が山前王に代作させているのであるから解釈出来なくなる言葉である。また、それは仮に代作を次のように定義していくとき、その矛盾がさらに明確になる。まず伊藤博氏は、代作について次のように述べている。<sup>(8)</sup>

事実にもせよ虚構にもせよ、ある人が別の人の立場に立つた形でうたつた作を「代作」と規定するならば、題詞や左注に代作であることを示す歌が万葉集にいくつかある。たとえば、山前王が石田王に代わつて作つたと伝える歌、

代作を他の人の立場というのであるから、紀皇女の挽歌を依頼された山前王は、依頼した人である石田王の立場でうたわなければならない。ところが、代作なのに「君」が登場していることから、石田王の代作をした山前王のうたう歌で解釈に疑問が出てくるのである。その疑問は、和田嘉寿男氏と三田誠司氏が既に指摘されている。<sup>(9)</sup>

そもそも「君」とは、紀皇女か、或いは石田王か、どちらかである。しかし、万葉集では「君」とは一般的に男性を指す言葉で、女性から男性に呼び掛ける時に用いたりする。女性を君とは呼称しないのであるから、この「君」は四二五番では常識的に石田王のことである。とすれば石田王を「君」と呼び掛けて創作したとすれば、山前王は石田王の代作したことになるのであろうか。しかし、この矛盾は、果たして正当な疑問なのであろうか。要は詠むべき人に為り代わりうたうのであれば良いのであつて、依頼した

人と同じ立場、或いは心情でなくてもよいのではあるまいか。即ち、依頼した石田王に仮託して山前王は、代作しなくとも良いのであつて、ただ代わりに作れば良いのであるということである。

そこで代作について考えてみたいが、記紀歌謡から代作を考えようとすると次の用例が参考になる。

I ここに建内の宿祢の命、御子の為に答へまつりし歌、

この御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて  
歌ひつつ 醸みけれかも 舞ひつつ 醸みけれかも  
この御酒の 御酒の あやに転樂し ささ

(記四〇)

武内の宿祢、太子の為に答へて歌ひしく、

この御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて  
歌ひつつ 醸みけれかも この御酒の あやに転  
樂し ささ (紀三三)

II 鮪の臣、影媛の為に答へて歌ひしく、

大君の 御帯の倭文服 結び垂れ 誰やし人も  
相思はなくに (紀九三)

III 皇太子、造媛徂逝りぬと聞かして、愴然傷恨み哀泣  
しみたまふこと極めて甚だしかりき。ここに野中の川

原の史満、進みて歌を奉りき。歌に曰ひしく、

山川に 鴛鴦二つ居て 偶よく 偶へる妹を 誰

か率にけむ 其の一 (紀一一三)

本毎きに 花は咲けども 何とかも 愛し妹が

また咲き出来ぬ 其の二 (紀一一四)

記紀歌謡から代作と考えられるのは、IとIIとの二例である。Iは記四〇番(紀三三)に見られる建内宿祢の命がうたつたとされる。これは、記紀ともども皇太子(紀によれば後応神天皇この時十四歳)が母である皇太后(神功皇后)の酒を勧める歌に答える謝酒歌をうたう時、皇子が若すぎるために建内が代わつてうたつてゐる。

もう一つはIIの紀九三番は、太子(武烈天皇)が影媛に求婚したとき、鮪が影媛の代わりにうたうことと、その歌によつて太子が鮪と影媛の關係をしつて恨むのである。親しいが故に代作したということになる。

一般的に代作とは、ある人の立場で歌を作るのであるから仮託と重なる概念である。にもかかわらず代作とするのは、なんらかの事情で人から歌が要請されて、うたうべき人がいるにもかかわらず代わつてうたう場合である。川原史満の紀一一三・一一四番は、歌が皇太子(天智天皇)の

立場からうたわれているが、代わって作ったとは記されていない。皇太子が歌を作る能力がなかったわけではないことは、万葉集に収められている歌を見れば知られることである。しかも、太子が依頼したわけでもないのに、自ら進んで歌を献上したとある。即ち、誰かの為に仮託した心情で歌を作り、そして歌を献上するというこの二点からは、歌うべき人に代わってうたったこととしても理解されるから、代作と見做されている。そして、歌は、依頼者とも言うべき太子に評価されている。

記紀の代作を見ると、天皇が歌を要請してそれに答える人物としては、建内と鮪の如く身近なものに限られているか、或いは満のように積極的に代作しているか、である。では人麻呂以前の代作は万葉集ではどうであろうか。

天皇の、宇智の野に遊獵しましし時に、中皇命の間人連老をして、献らしめたまへる歌

やすみしし わご大君の 朝には とり撫でたまひ  
夕には い縁せ立たしし 御執らしの 梓の弓の 中  
珥の 音すなり 朝獵に 今立たすらし 暮獵に 今  
立たすらし 御執らしの 梓の弓の 中珥の 音すな  
り (三)

## 反歌

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草  
深野 (四)

万葉で代作歌として論じられる最も古い作品は、三、四番である。この歌の作者については、中皇命が間人皇后であり、皇后が間人連に代作させたものである。また、間人は、間人皇后の乳母と関わる氏族であろう。では何故に皇后は、間人連に代作させたのであろうか。

やすみしし わが大君の 朝間には いより立たし  
夕間には いより立たす 脇几が下の 板にもが あ  
せを (記一〇四)

引用した古事記歌謡の類似から判断すれば、袁杼比売が雄略天皇の宴で比売がお酒を献上して、それに天皇がうたった歌に返歌したものであるから、遊宴での歌である。記歌謡の類似からは、それと同様の立場で代作した歌である。即ち、男性である間人老は、女性である中皇命と神野志隆光氏という「歌の共有」という立場で、また犬飼公之氏のいう「巫女・神人が担い、高貴な女性が果たしたこのことばの力」を引き継いでうたっている。この代作とい

言葉は、額田王の歌を説明する場合によく用いられている。額田王は、万葉に長歌二首を含めて十二首の歌を残している。そこからは多面的な作家活動が知られるのであるが、初期万葉の歌人と同様に生没年も未詳である。しかし、初期万葉の歌人にもかかわらず、額田王は当時の結婚適齢期といわれる年少時の皇極朝から、六十歳代であろうと思われる持統朝までの息の長い歌作活動による作品が知られるのである。

額田王の代作と人麻呂の代作の違いについては、

人麻呂の宮廷歌は、額田王の代作歌ほど天皇や皇子一人の心を代弁するというがわに立っていない。宰領に対し、額田王には距離がなく人麻呂には距離がある。

と、伊藤博氏が簡潔に述べている。<sup>(11)</sup>

このように判断してきた時、明らかに「君」が紀皇女挽歌に登場していることは、依頼者の心に為り変わるといふよりも、人麻呂的代作の方法で可能になる。とすれば、依頼した石田と依頼された山前王との関係は、友人などというよりも、上司と部下、貴人と家人とでも対照される身分なのであろう。山前王は、石田王に仮託してその心情でうたったのではなく、献呈挽歌のような立場で作歌していた

のである。その意味では、反歌として利用された挽歌二首も長歌も創作の立場が統一されていたのであり、長歌の左注にある人麻呂作が信憑性の高いものである。

代作に類似する創作の立場として仮託がある。ある人物に仮託する。女性に仮託する。物語の登場人物に仮託する。歴史上の人物に仮託する。仮託と代作の違いは、依頼した人物、或いは集団がいるかどうかとすることであるまいかとすれば代作を仮託という枠のなかで理解するべきであるまいか。すなわち、代作と言う仮託である。

さて、代作には形式的に二種類ある。<sup>(12)</sup>一つは、依頼されて代作する場合である。もう一つは依頼されなくても、仮託して作られたものが披露されたり、献上された場合も代作として捉えることである。即ち、憶良の日本挽歌は、仮託されて献上されたが故に代作なのであって、仮託されただけでは代作にならなかったし、旅人の依頼により創作されたものでもないであろう。

山前王が恐らく上司であろう石田王の死を悼み挽歌をうたった時、以前代作していた紀皇女の挽歌を利用して長歌と反歌からなる大作をものした。しかし、長歌は人麻呂に代作させた内容があった。それは、長歌の表現の特質に伺えた。人麻呂が代作した長歌の特質は、まず既存の山前王

の詠作した反歌に基づいて創作されていた。長歌の夏と秋の対句的な対称は、まさしく既存の紀皇女挽歌によるものである。そして、その代作は、献上挽歌の立場と等しいものである。

## 結 び

石田王の死を悼む挽歌は、柿本人麻呂が代作した作品であろう。それは、作品の分析からも裏付けられた。長歌は夏と景物である花橘を玉に貫き縷にして、秋を代表する九月の黄葉を折って挿頭にしてという美しい形容が「延ふ葛の いや遠永く 万世に 絶えじと思いて」という命の長久を修飾していくところに個性があつた。また、夏と秋と言う対比も斬新なものであり、一般的に長い年月を春と秋の対照で描写している表現とは異なる。

さて、既に存在していた紀皇女の挽歌を踏まえて、長歌は作られているのであつて、泊瀬挽歌の伝統に繋がる内容がある。加えて長歌は磐余の地名のみを描いて直接道行きにしているが、言外に泊瀬から磐余を経て、そして藤原京と言う解釈がされ得る道行きの表現である。この道行きも挽歌の伝統表現である。

以上の事柄と異伝の存在、さらに山前王が忍壁皇子の子

供であることなどを加味していく時、長歌はますます人麻呂の作品と見做して良いことになる。伝統的な長歌の挽歌は、やはり一回的な素人歌人には荷の重いことだったのであるまいか。日本書紀歌謡七五番は、雄略天皇を刺した蛇を蜻蛉が食べてしまったので、天皇が蜻蛉を讃める歌の依頼があつても、群臣から返歌がなかったので、結局天皇がうたう例である。

挽歌の場合もそれなりの評価が得られることが作品には求められていたのかもしれない。また、評価されていたから異伝もしるされているのである。とすれば山前王には、人麻呂に依頼する術があればしたのであろう。この旧作を反歌に加えた長歌を伴う挽歌は、山前王が形式作者であり、実作が人麻呂ということになる。但し、紀皇女挽歌の代作は、心情までも依頼者になつて詠んでいないのであるから、人麻呂的な献上挽歌に類似していて、記紀歌謡そして初期万葉集では見出し難い内容を示していた。

## 注

- (1) 折口信夫氏は、額田王を「代作歌人」と「額田女王」(『折口信夫全集(第九卷)』所収)で規定している。続いて伊藤博氏は、「代作の問題」(『古代和歌史研究(第三



卷』所収）では代作を王が天皇の立場でその心境になり  
かわってうたっているとして、さらに「集団的に心が融合  
し天皇に成り代わってことばを発する」ところから「御言  
持」とした。

- (2) 『万葉集注釈』（第三卷）五二二頁～五二三頁
- (3) 「挽歌の代作——万葉集卷三石田王挽歌をめぐって——」  
〔共立国際文化〕創刊号〕
- (4) 「倉橋部女王」（『万葉歌人事典（雄山閣）』所収）  
注3に同じ。
- (5) 注3に同じ。
- (6) 『万葉集全訳注』四八五番脚注
- (7) 「こもりくの泊瀬小国——卷十三・三三三・〇〇三三三を  
めぐって——」（『武庫川国文』第三十三号）
- (8) 注1伊藤氏に同じ。
- (9) 和田氏注7に同じ。
- 三田氏注3に同じ。
- (10) 神野志氏「中皇命と宇智野の歌」（『万葉集を学ぶ（第一  
集）所収）
- 大飼氏「中皇命と宇智野」（『万葉の風土と歌人』所収）  
注1伊藤氏に同じ。
- (11)
- (12) 代作を「代作歌」「献歌」「創作歌」「共有歌」という四  
つに分類して考えようとしているのは、三塚貴氏（『万葉  
集』における代作の諸相」（『新大國語』第十二号）であ  
る。傾聴すべき説であるが、改めて研究の対象にしたい。